

国土社版 世界の名作

クリスマス・キャロル

チャールズ・ディケンズ＝原作

吉田新一＝訳



国土社版 世界の名作 2

クリスマス・キャロル



チャールズ・ディケンズ
クリスマス・キャロル 吉田新一訳
国土社 1977
237p 21cm (国土社版 世界の名作2)

基本カード記載例

国土社版 世界の名作2

クリスマス・キャロル

昭和52年11月20日 初版印刷

昭和52年11月30日 初版発行

著者 チャールズ・ディケンズ

訳者 よしだしんいち 吉田新一

発行者 長宗泰造

発行者 株式会社国土社

〒112 東京都文京区目白台1-17-6

電話 東京 (03) 943-3721(代)

振替 東京 6-90631

印刷所 株式会社厚徳社

チャールズ・ディケンズ作

吉田 新一訳

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



クリスマス・キャロル・もくじ

クリスマス・キャロル

5

まえがき

7

登場人物

8

第一節 マーレーの幽霊

11

第二節 最初の霊魂

50

第三節 二番めの霊魂

88

第四節 最後の霊魂

135

第五節 むすび

167

魔法のさかなの骨

183

ゴブリンにさらわれた墓掘り男

209

解説

234



装幀／梶 鮎太
さし絵／こさかしげる

ク
リ
ス
マ
ス
・
キ
ャ
ロ
ル

まえがき

わたしはここに、わたしの頭が考えついた幽霊の登場する、ささやかな幽霊の本を書いてみました。わたしは読者のみなさんがこの幽霊のために、ご自分や、おたがいどうしや、クリスマスや、作者のわたしに、いらいらなさらないようくふうをこらしました。どうか、この幽霊が、みなさんのお宅にもあらわれて、みなさんをたのしめますように。そして、どなたもこの幽霊の出ないことを願ったりなさいませんように。

みなさんの忠実な友であり、しもべである チャールズ・ディケンズ

一八四三年十二月

登場人物

ボブ・クラチットⅡエブニーザ・スクルージの事務員

ピーター・クラチットⅡボブ・クラチットの長男

チム・クラチット(チム坊や)Ⅱボブ・クラチットの足のわるいちばん下の息子

フェッジウィック氏Ⅱ心のやさしい、陽気な年よりの商人

フレッドⅡスクルージの甥

〈過去のクリスマス〉の幽霊Ⅱ過去のできごとを見せる亡霊

〈現在のクリスマス〉の幽霊Ⅱしんせつで、やさしく、あたたかな性質の靈魂

〈未来のクリスマス〉の幽霊Ⅱこれから起こりそうなことの影を見せる精霊

ジェイコブ・マーレーの幽霊Ⅱスクルージのむかしの仕事仲間の幽霊

ジョーⅡ船具屋で、盗品の買入れもする老人

エブニーザ・スクルージⅡけちで欲のふかい老人。ヘスクルージとマーレー商会の共同経営者だが、相

手は死んで、いまはひとり残る

トッバーくんどくしん 独身の青年せいねん

ディック・ウィルキンズとていばうこう スクルージがむかし徒弟奉公なにかをしていたときの仲間

ベルびじん 美人のおくさん、スクルージのむかしの恋人こいびと

キャロラインしゃつぎん スクルージに借金をしている男の妻つま

クラチット夫人ふじん 〓ボブ・クラチットの妻つま

ペリンダとマーサー・クラチットむすめ 〓ボブ・クラチットの娘たち

ティルバーさんせん 〓洗たく女おんな

ファンいもうと スクルージの妹

フェッジウィッグ夫人ふじん 〓フェッジウィッグ氏しのお似合いにの妻つま

第一節 マーレーの幽霊

最初さいしよにいつておきますが、マーレーはもう死しんでいて、いないんです。これについては一点てんの疑うたがいもあります。マーレーの埋葬まいそう記録簿ろくぼには、牧師ぼくしも、教会きやうかいの書記しきも、葬儀屋そうぎやも、喪主もしゅも、ちゃんとみんなサインしているんです。なにしろ、スクルージがサインしているんですから。スクルージの名まえは王立取引所おうりつとりひきじよでもよく知られていて、彼のサインしたものはみんな信用しんようがありました。とにかくマーレーおじいさんが死しんでいることは、ドア・ノッカー（玄関げんかんのドアのまん中につけるたんすのかんちのような形の金具かなぐ。訪問者ほうもんしゃは呼び鈴りんがわりにそれをたたく）のくぎくらしいたしかなことでした。

ちよっとおことわりしますが、英語えいごのたとえにヘドア・ノッカーのくぎのように完全かんぜんに死しんでいるといういいかたがあつて、そこにふくまれている死しとドア・ノッカーのくぎとのとくべつな関係かんけいについて、わたしがなにか知っているなどというおうとしているんじゃないやありませんよ。金物かなもの屋やの商品しょうひんのなかでなら、むしろ棺箱かんばこのくぎがいちばん死人しにんくさい、とわたしは思っています。け

れども、祖先の知恵はこういうたとえのなかにひそんでいるので、おろかなわたしの手が、やらとそれをぶちこわしたら、国をほろぼすものになるでしょう。それで、読者のみなさんのおゆるしを願って、もういっぺん声を大にしていわせてください——マレーはドア・ノッカーのくぎのようにたしかに死んでいました。

スクルージはマレーの死んだことを知っていましたか？ もちろん、知っていましたとも。どうして知らなかったなんてことがあるでしょう？ スクルージとマレーは何年間だか知りませんが、長い長い年月いっしょに仕事をしていた仲です。スクルージはマレーのただひとりの遺言執行者、ただひとりの遺産管理者、ただひとりの財産譲受者、ただひとりの残余財産受遺者、ただひとりの友人、ただひとりの遺族だったんですよ。スクルージはそれなのにマレーの死んだことをなげき悲しむどころか、葬式の日だって、りっぱな商人ぶりを発揮して、確実に利益のあがる葬式をいとなんだんです。

マレーの葬式の話をしたところで、もういっぺん最初の話にもどりますが、マレーの死んだことはぜったいに疑いのないことです。この点をはっきり理解しておいてもらわないと、これからの話がふしぎでもなんでもなくなってしまう。例のシェイクスピアの『ハムレット』も、芝居のはじまるまえに、ハムレットの父が死んでいることをちゃんとつかんでおかないと、夜、東風とともに、城壁の上をハムレットの父がさまよるのがすこしもふしぎじゃなくなって、どこ

その中年紳士が、きもつ玉の小さい息子^{むすこ}を文字どおりおどかしてやろうと、日が暮れてから、風のよく吹くところ——たとえば、セント・ポール寺院^{じいん}のあたり——へぶらりと出かけていったみたいな話とちつともちがわない話になっちゃいますからね。

マーレーおじいさんがいなくなったのに、スクルージは名まえを塗りつぶさないで、倉庫^{そうこ}の戸口^{とぐち}の上には、何年^{なんねん}たってもヘスクルージとマーレー商会^{しょうかい}と書かれたままでした。それで会社^{かいしゃ}はずっとヘスクルージとマーレー商会^{しょうかい}として知られていて、あらたに取引^{とりひき}をはじめた人たちはスクルージのことを、ときにスクルージさん、ときにマーレーさん、と呼んではいましたが、そのどちらにもスクルージは返事^{へんじ}をしていました。どちらでも、スクルージはかまわなかったんですね。

それにしても、スクルージは徹底^{てつてい}したけちんぼうでした！ しぼれるだけしぼりとる、根こそぎもぎとる、つかんだらはなさない、あらいざらいかつさう、にぎり屋^やで、欲ばりの、ばちあたりなじいさん！ ごつごつして固^{かた}いところはまるで火打石^{ひうちいし}、それもどんなはがねを打ちつけても、いちどだってあたたかな火を出したことはない火打石。口をつぐんで、人とうちとけず、孤独^{どく}なところは海^{うみ}のかきそっくりでした。心のなかのつめたさで、年老^{としお}いた顔^{かお}はこおりつき、とがった鼻^{はな}はしなび、ほおはこけ、足はこわばり、目は赤く血ばしり、うすいくちびるはあおざめ、口からは耳ざわりな声^{こゑ}ががみとびだしました。頭にも、まゆにも、細^{ほそ}くとがったあごにも、

白い霜しもがおりにていました。そして、そのつめたい温度おんどをたえずまわりにふりまいて、夏なつのもっとも暑い時期あつじきにも自分の事務所じむしょをこおりつかせ、クリスマスがきても、ふだんより温度おんどを一度さげて事務所じむしょの氷こおりをとかそうなんてしませんでした。

外あつがどんなに暑あつかろうが寒さむかろうが、スクルージにはほとんど関係かんけいありませんでした。どんな暑あつさも彼かれをあたためることはできず、真冬まふゆの寒さむさも彼かれをこごえさせることはできませんでした。

どんなつめたい身みを切る風かぜも、彼かれほどはひどくなかったし、どんなにはげしくふる雪ゆきも、彼かれにはかなわなかったし、どんなにどしゃぶりの雨あめでも、彼かれほど無慈悲むじひではありませんでした。どんな悪天候あくてんこうも、彼かれには齒はがたちませんでした。どんなにひどい雨あめでも雪ゆきでもあられでもみぞれでも、彼かれよりまさっていると誇ほこれるのは、たった一つきりでした。それは、雨あめたちはおしみなくへふりそそげた、けれども、スクルージは金かねをおしみなくへふりそそげなかった、ということでした。

だれひとり街まちで通りすがりにスクルージに声をかけて、「やあ、スクルージさん、こんにちば。こんど、うちへ遊びあそびにいらっしやいませんか？」と、うれしそうな顔かほでいう人ひとはいませんでした。わずかなほどこしでも彼かれにもとめるこじきはいませんでした。いま何時なんじ？ と、彼かれに時間じかんをきく子どもも、これこれの場所ばしょへ行く道みちを教おしえてくださいたのむ男女だんじよも、スクルージには生まれて以来いらいひとりもいませんでした。盲人もうじんのつれてゐる犬いぬですら、スクルージを知しっているらしく、彼かれが近づいてくると、主人しゅじんを家の戸口とぐちや路地ろじにひきこんで、まるで「目のわるいご主人さ